

地域にひろがるオープンアトリエ

すすんで



ひらいて



つながる

ための
ハンドブック



地域にひろがる
オープンアトリエ

すすんで

ひらいて

つながる

ためのハンドブック

はじめに

はたらく、くらす、続いていく日々のなかで、表現活動に自由に参加し交流できる場があったら、毎日がもっと楽しくもっと豊かになるかもしれません。

一人ひとりの違いを認めあうことができる時間。誰かと出会い、一緒にアートを楽しめる、小さくても地域にひらかれた場。こんな創造的空間を、わたしたちは「オープンアトリエ」と呼んでいます。明確なモデルやルールはありません。参加している人たちの意志や工夫によって生まれる多様な取り組みと、なにより「自分たちでやってみよう」という意志と主体性が特徴です。

わたしたちは、奈良を拠点にケアとアートに関するさまざまな活動を実施し、県内外、国内外から障害とアートについてのさまざまな相談対応や支援を行ってきました。

そんななかで出会ったのが、特別支援学校や支援学級を卒業したあとで、創作する場や時間が大幅に減ってしまうという先生や保護者、そして障害のある本人たちの声でした。創作を続けたい人に対して先生や身近な人たちが有志で支えているという事例も聞きました。このような話はきっと奈良に限ったことではありません。

そこで、実験的に奈良県内4ヵ所でオープンアトリエを実施し、そこに参加する人の声をまとめ、取り組みから発見できることを共有していきたいと考えました。

具体的には、県内4つのエリアで異なる場所や内容、対象を設定し、障害のある人もない人も創作活動に参加できる場をつくりました。

そして、活動を実施するなかで大切に感じたポイントとあわせて、すでに全国で取り組まれているさまざまな活動事例を掲載したのが本書です。

前半は、わたしたちが出会った現状や課題をマンガにし、それに対して全国各地で実践している人たちの取り組みを掲載しています。後半は、今年度開催した4つのオープンアトリエのようすを紹介しています。

本書で書かれていることはどれも一つの事例です。その気になれば創作の場も発表の場も、どこでも誰でもつくれるということを伝えたいと思います。制度や仕組みがない分野だからこそ、自分たちで考えて、アイデア次第で挑戦できるチャンスがあります。

そしてオープンアトリエを施設や学校、家庭などでの個人の活動の間をつないだり補ったりする存在としてとらえると、新しい可能性が見えてきます。

本書を手にとったみなさんが、楽しみながら一歩をふみだす一助になれば幸いです。

もくじ

エピソード 00

オープンアトリエのはじまり 07

表現活動の場は、必要ですか？

後藤裕美、正井隆晶、赤川義之、
仲川ともみ

Research

障害のある人の地域における
表現活動の状況

エピソード 01

自由に表現する場所をつくる 15

Column

創造的な環境をつくる

「表現活動の場のありかた」

中津川浩章

Tips

オープンアトリエづくりのヒント

エピソード 02

自分たちのまちをアトリエに！ ... 25

魅力的な場所は、どこにあるの？

鰺坂兼充、沼田里衣、島久美子、武捨和貴

Column

地域にある魅力的な場所

「アートは生きる力

—— いつでもどこでも誰でも」

関口怜子

エピソード 03

豊かな関係性を育む 33

サポートするときに大切なことは？

八田育美、鈴木温、藪内美佐子、南部充央

Column

豊かな関係性を生み出す

「アート活動から生まれる、人と人との
対等な信頼関係」

岡崎潤

エピソード 04

表現を分かちあう 46

Column

表現を分かちあえる場づくり

「どこで誰とどのように表現を共有するか」

西尾美也

「ホイホイとムズムズと向きあう」

角地智史

Data

発表すること、分かちあうこと

4つのオープンアトリエ

実践編 56

mirumiru 58

わくわくポン! 64

印象のまなざし 70

ふれあう大地のおすそわけ! 76

エピソード 05

生活のなかにあるアート 49

Interview

はたらきながら表現を楽しみ、

発表すること

向川貴大

福祉施設の職員になって4年目。アート活動を通じて周囲から頼りにされはじめるも、突飛な行動がたまにキズ!? あいかわらず、せんべいトレーナーがお気に入り。

エピソードの主人公
ほが山らか夫さん



この本は……

前半＝さまざまな方からの悩みや相談をもとに、とある福祉施設の若手職員を主人公として、地域で創作活動を実践する「オープンアトリエ」ができるまで、運営上の課題などをエピソード仕立てで紹介しています。



①

オープンアトリエの実践者「ほが山さん」が、さまざまな人のニーズを聞きながら地域にアトリエをひらくエピソードを紹介。



②

実践者や専門家によるそれぞれの取り組み方や考え方を紹介。
章ごとにコラムもあります。



③

それぞれのエピソードで大切にしたいことのまとめ。

後半＝2015年度に、奈良県内で開催した4つの「オープンアトリエ」を写真とともに紹介しています。

読んでもらいたい人は……

- ・ 障害のある人とともに地域での創作活動に取り組んでいる人、またはこれから取り組みたいと考えている人。
- ・ 学校の先生や障害のある人の家族、障害のある人本人など、アート活動に興味のある人。
- ・ 活動に興味をもってくれている人は誰でもOK!

この本を読んだあとは……

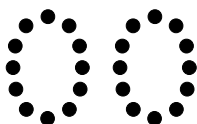
- ・ 言葉や事例を手がかりに、自分と置きかえて考えてみてください。
- ・ ハンドブックをポケットに入れてチャレンジしてみましょう。

エピソード



オープンアトリエのはじまり





アートを楽しむ場って、 どうしたらつくれるの？

福祉施設で障害のある人たちのアート活動が続けるなか、さまざまな人との出会いや試行錯誤が糧となり、施設の内外からいろんな相談を受けるようになりました。今日の相談者は、近所の特別支援学校の高木先生！

卒業した教え子たちから「アート活動ができる場がなくなってしまった……」という悩みを聞き、先生が自ら休日を使って、自宅まで伺い、サポートしているとのこと。そのうち、希望者も増え、何人も掛け持ちしているうちに、だんだん手が回らなくなってきたそう……。施設で活動する人も、企業に就職した人も、自宅で過ごす人も、休みの日や「やってみたい！」と思い立ったときに、自由に表現を楽しめるもうひとつの居場所があればいいのに……。福祉施設のプログラム以外での活動は経験はない

ものの、困っている人がいるかぎり、チャレンジするしかない。よし、卒業後も集まれる「オープンアトリエ」をつくってみよう！



自分自身を表現する、 発表・創作の楽しさ。

気楽に行けて、自由に、あるいは助言のもと表現活動に取り組める場所があればと思います。学生時代に創作の楽しさを学び、いきいきと表現していた生徒が、卒業すると発表の場がなくやめてしまうことが多いからです。物事に打ち込める場を望む保護者の声も聞きます。イベントのメールを配信するメディアがあれば、参加しやすくていいですね。

創作の場は、 生活を豊かにします。

盲学校卒業後、視覚障害者用のスポーツや音楽活動に取り組む人はよく聞きますが、「描く」「つくる」などの創作活動は少なく、個人レベルにとどまっています。生活地域では、視覚障害者が1人のことも多く、創作の場があると、人とのつながりも増えます。完成品を持ち帰って、家族や友だちに見せる楽しみも広がり、生活が豊かになりますね。



後藤 裕美さん 奈良

奈良県立奈良東養護学校
進路指導部教諭



奈良県障害者芸術祭「アートクル・ドキュメント」に参加し、アーティストが学校に来て、簡単な手法でパッチワークをするワークショップを行いました。作品の多様さに、生徒も先生も沸きました。

表現活動の場は、



正井 隆晶さん 奈良

奈良県立盲学校 美術教諭



抽象作品では、先輩の作品を後輩に見せ、題名を考えさせたりします。ツルツルした作品は、固いはずなのに柔らかく感じられ、生徒も不思議がります。抽象表現への理解が開く瞬間です！

赤川 義之さん 奈良

NPO法人ならチャレンジド理事長



「笑顔にしてくれるパワー、最高です」。
ワクワクした感想も寄せられるアート展
へ、テレビ局の取材もありました。生徒た
ちは、自ら説明し、来場者とふれあうなか
で自信、創作意欲を深めています。

好きなことで 社会と関わる幸せを実感

社会参加活動や職場実習で学校を訪
ねて見た作品は、宝物に出会った喜び
でした。「もっと多くの人に」と特別支
援学校長会へ呼びかけ、2012年から
「キラリと輝く！ 特別支援学校アート
展」を開催。作品説明など、作家自ら行
動し、来場者の感動を実感することを
大切にしています。作家、来場者の
両者の出会い、共感こそがかけ
がえのない幸せですよ。

オーブンアトリエのはじまり

必要ですか？

仲川 ともみさん 奈良

初級障害者スポーツ指導員
福祉レクリエーション・ワーカー



奈良駅周辺約50店舗での作品展「プライ
ベート美術館」に娘が参加。日常生活のな
かで作品が地域のなかにとけこみ、お店
のオーナーさん、参加者、地域の人々との
交流へと発展していくと楽しいですね。

自分を安心して出せる 居場所、方法を。

人が人を理解しようとするとき、
大切なのは「本人を見て、関わるこ
と」だと思います。幼いころから地
域のなかで、彼らが楽しいと感じられ
る場所を家庭や学校、福祉サービス以外
にもつくっていくこと。表現活動って、
本人が「私はここにいるよ、私ってこん
な人」という発信じゃないかな。彼らが
自分を安心して出せる居場所、方法を
もっと増やしていきたいです。

Research 障害のある人の地域における表現活動の状況

現在、特別支援学校などを卒業した障害のある人が表現活動に参加できる機会は多くありませんが、「障害とアートの相談室」には表現活動の場への期待の声がよせられています。そこで、以下のような調査を行いました。

期間：2015年8月～10月 目的：ニーズを明らかにし、サポートする仕組みを考えるため

養護学校に聞きました

アンケート調査：奈良県内の養護学校に実施 7校回答／13校送付
インタビュー調査：養護学校の進路指導や美術の教員などに実施

○ アート活動について感じていること

- ・ともに創作し、共感しあえる仲間ができる
- ・発表することで、さまざまな人との出会いの機会が増える
- ・精神的により影響があり、安定した就労につながる
- ・仕事以外に息ぬきする場や時間ができる
- ・充実した余暇活動になる
- ・一方で、卒業後つながりのうすい生徒に対しては、アート活動に関する情報が伝わりにくい現状がある

○ どんなサポートがあるといい？

- ・アート活動を行える場所が地域にあるといい
- ・制作についてアドバイスしたり、見守ったりする人が必要
- ・少ない負担で材料を用意する方法を知りたい
- ・大きな展覧会以外にも発表の場がほしい
- ・活動や発表の機会についての情報がわかるツールがあると嬉しい
- ・絵画教室などでの受け入れが進むといい

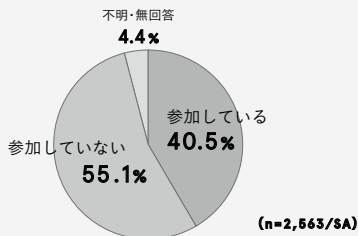
障害者の文化芸術活動の状況

出典：「平成19年度障害者施策総合調査」(内閣府)

対象者：全国に住む障害のある人 5,124人(有効回答：2,563人)

Q1. スポーツ・文化芸術参加状況

調査によると、参加していると回答したのは、全体の40.5%。そのなかでの参加頻度アンケートでは「毎週」が最も多く(34.8%)、具体的な活動は、「音楽」が最も多く、次いで「絵画」「陶芸」となっています。



地域の絵画教室に聞きました

アンケート調査：奈良県内の絵画教室、造形教室に実施
6教室回答／30教室送付

インタビュー調査：障害のある人を受け入れている絵画教室に実施

○ 障害のある人の受け入れは可能ですか？

受け入れ可能：2教室 断っている：4教室

受け入れが可能と答えた教室から

- ・ 障害のある人で最長8年通った障害のある人もいる
- ・ 障害のある人だからといって、特別なことはしていない
- ・ 活動内容や発表について本人の意思を尊重している
- ・ みんなで意見や感想をいいあっているので、障害のある人ともいい関係ができています

断っていると答えた教室から

- ・ 1人で教室を運営しているため目が届きにくい
- ・ 障害の特性を理解した支援者がいない
- ・ 教室がバリアフリーになっていない
- ・ 過去に障害のある人を受け入れて大変な思いをしたことがある

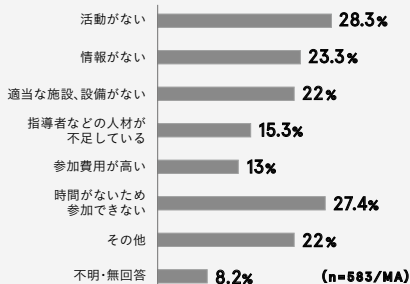
○ 障害のある人を受け入れるにあたって、必要なサポートとは？

- ・ スタッフ数の充実、ゆとり
- ・ 障害の特性にあった指導をするための知識や技術を持った人の存在
- ・ 入り口、アトリエ、トイレのバリアフリー化

Q2. 参加したいけどできない理由

参加しない、できない理由を調査したところ、希望する活動や情報、適当な施設・設備や人材が不足しているなど、スポーツ・芸術文化活動に取り組むための環境に関する回答が多いことがわかります。

※ Q1で「参加していない」と答えた1,413人に今後の参加意向を聞き、「参加したい」と答えた583人が回答



現状から見えてきた、必要なサポート

1

それぞれの地域で サポートできる人材の育成

アート活動のノウハウをもち、障害のある人の表現をサポートできる人を育てていくこと。そのためには、まずは関心のある人をつないでいく場が必要です。

2

作品や表現を 発表できる機会づくり

学校を卒業してしまうと創作だけではなく、発表の機会も少なくなってしまう。仲間同士での展覧会やワークショップの発表の場をつくっていくことも大切です。

3

サロンのような 自由な場の創出

アートを通して交流したり、情報交換したりできる機会を求めているのは障害のある人だけではありません。そうした場をつくるのが地域全体を豊かにしていきます。

4

気軽に情報を 得られる環境の整備

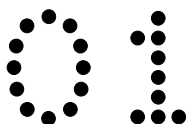
ウェブサイトやメールニュースなどのツールや、地域の画材屋や福祉施設などでのポスターによる広報など、身近な場で情報が得られる仕組みが必要です。

エピソード



自由に表現する場所をつくる





自由に創作ができる環境は どうやってつくったらいいの？

これまでの経験を生かし、仲間たちからの協力を得ながら、誰でも参加できる「オープンアトリエ」をはじめること。まずは、勤務している福祉施設が休みの日に、地域の人へ開放するということに挑戦してみました。ふだんは休憩室として使われている小さな部屋を、みんなの創作意欲がわくような雰囲気の良い空間として演出していきます。日常的に使われている施設を活用する場合は、電気や水道などのインフラはもちろん、建物もバリアフリー対応なので、参加者も安心です。空間が確保できたら、今度は、プログラム。参考資料を並べてみたり、画材のバリエーションを増やしたり、参加者にとって無理のないスケジュールをつくったり、会場までのアクセスを考えてみたり……。開放的でゆるやかな空間も大事だけど、継続して運営していくためには、どんな工夫や準備が必要なんだろう？



表現活動の場のありかた

中津川浩章

【美術家、エイブルアート芸術大学 ファシリテーター、「アール・ド・ヴィーヴル」アートディレクター】



いつも心がけているのは、シンプルに、肯定的に、自由に、ということです。ここに来れば、自由に表現できるという空気をつくりだすこと。なぜなら「自由に表現する」ことが、実は一番難しいのです。お茶でも飲みながら話すなど、リラックスした和やかな雰囲気も必要でしょう。けれど、本当に大事なことは「見守る」ことです。集中したり迷ったりしているようすをとらえながら、言葉をかけてもかけなくてもいい、一人ひとりを見て回る。誰もが見守られながら、安心して表現に没頭できる、そういう環境のなかで、はじめに抱いていた目論見とは違うかもしれない自身の内なる声を聞き、いま、この場所で本当にしたいことは何なのかに気づくこと。そこに自由に表現する道はおのずからひらかれていくでしょう。

もうひとつは人間がもっている遊びの感覚を大切にすること。「遊び」には正解がない。自分自身がいか楽しめたか、基準は自分自身のなかにあります。大げさに考えずに、まずは「遊び」からはじまって表現やアートに広がりつながっていく。だから素材は必ずしも画材でなくてもいいのです。もっと言えば、たとえ描かなくても、つくらなくても、その場の自由な感覚を共有することでその人の何かが動き出すかもしれないのです。

作品について曖昧にほめたりするのではなく、ここの色がいい、ここまではいいいけどここは迷っているように見えるなど、できるだけ具体的に伝えます。それぞれの個性にきちんと向きあうこと。そこに生まれる信頼関係のなかで少しずつ大胆になって、作品の自由さにつながっていきます。画一的なメソッドで

はない個々に違ったアプローチが必要で、だから、ファシリテートするにはたくさんの引き出しが求められます。

理想的な場所をめざすのではなく、ここに来たら少なくとも表現のなかでは自由にふるまえるという場所をつくること。そうすればそこは「必要な場所」になっていくのだと考えています。

安心できる場から生まれる表現とつながり

中津川さんが関わっている2つのアトリエ活動を紹介します。
その人らしい自由な表現が信頼関係のなかから生まれています。

エイブルアート芸術大学美術学部



東京を拠点に、月1回開催している福祉サービスによらないアート教室です。「生きることは表現すること」をコンセプトに、表現することを通じ、他者を発見し、自己を肯定していくことの感覚を共有することを大切にしています。数人ではじまった活動も、現在では描きたい人、サポートのボランティアあわせて毎回20人以上が参加。にぎやかな教室になっています。

アール・ド・ヴィーヴル



神奈川県小田原市を拠点に、主に知的に障害のある子どもから大人までを対象にした多様なアートワークショップを開催。絵画、陶芸、織り、料理、ヨガ、バレエや美術鑑賞、野外活動など、活動はさまざまです。障害のある人がもっている力が輝く場をつくり、自分らしく生き、地域社会につながっていくことを目的としています。

Tips オープンアトリエづくりのヒント

空間

創作意欲が
刺激される環境づくり。

誰にとっても気持ちよく創作ができる空間には、さまざまな工夫があります。けれど、空間にこだわっていくと、時間もお金もかかり過ぎることが難点。ときには、ごちゃごちゃと物にあふれている空間に、創作意欲が刺激されることもあるかもしれません。参加者が自発的に「この場で何かつくりたい！」と思える空間こそ、最高のアトスペースではないでしょうか。

Example



採光ができて明るく、それぞれがやっていることが見渡せる広さと風通しの良さ



汚れてもいいようにしっかり養生をすることで、集中しておもいきり楽しめるように



画材置き場は1か所にとまとめ、新しい画材にチャレンジできる、お試しコーナーも



周囲のものが気になるときはかわいい目かくしでかくしてスッキリ

Point!

まずは、自分たちのできることから始めよう！

ときには雑多な空間やせまいところが落ち着くことも！

休憩したり、息抜きできる場所もあればベター！

画材 ・ 材料

表現したいという想いを、
かたちにできる画材・材料選び。

表現したい想いは人それぞれ。参加者に適した材料を見つけることは、とても大事です。アート活動のなかでは、画材や材料にかけられるお金が限られることもあります。しかし、少ない予算のなかで、障害のある人たち一人ひとりにとってベストな画材を試行錯誤し、運営していくのは、喜びと発見に満ちた、やりがいのあることです！

Example

購入先を
選ぶときは……

画材屋、文房具屋、ホームセンター、100円均一ショップ、美術教育用の教材カタログ、ネットショップ、自然のなか、など積極的にどこでも探してみましょう。まとめ買いすることで安く入手できることも！

素材を
買うときは……

量をたくさん使う養生は、新聞紙、園芸用のビニールハウスのシートなどが安価で便利。逆に、共有の筆や絵の具など“長く使うもの”が、安価なものだとすぐに劣化してしまいます。品質と価格は用途にあわせて考えましょう。

素材を
選ぶときは……

素材と表現との向き不向きは、使ってみてはじめてわかることもあります。思わぬ素材が、表現のキモになることもよくあるので、美術用画材に限らず用意してみましょう。素材を楽しんで探して、とにかくさまざまなものを試してみましょう！

Point!

表現を自然に引き出し、個性を生かせる素材を探そう！
先入観をなくし、多様な素材、触感、表現方法を試すこと！
用途と価格を併せて、検討してみよう！

Tips オープンアトリエづくりのヒント

時間

アートの時間は、
つくる時間だけではなく。

創作の導入になる時間。集中して表現することを楽しむ時間。おたがいに刺激を与えたり、もらったりする時間。誰かの表現をみる時間。自分の表現について、アドバイスや意見をもらう時間。1日のプログラムのなかで、どう時間を組み立てていけば、安心してのびのびと創作したり、交流したりできるのか考え、全体のスケジュールを構成していきましょう。

Flow

1 自己紹介の時間

まずは、ひとつの場所に集まって、顔あわせの時間です。緊張感をつくらず、親しみやすく、心地よい雰囲気で作成の導入をつくりましょう。



つくる前に仕上がりのイメージを共有することも大事

2 創作の時間

にぎやかに創作する人や、集中して黙々と創作する人など、それぞれの参加者にあわせて、コミュニケーションをとっていきましょう。

3 お茶＋交流の時間

作品が一段落したら、一息ついてお茶の時間です。それぞれの作品を見ながら交流し、のんびりと刺激のある時間をめざします。



はじめて会う人たちも少しずつ和やかな雰囲気に

4 片づけの時間

片づけるところまでがオープンアトリエ！ 会場を借りることも多いので、次の開催に差し支えないよう、協力して掃除を行います。

Point!

つくる前に、関係づくりの時間をもとう！

それぞれのペースを、おたがいに尊重できるように！

鑑賞したり、共有したりする時間をつくろう！

講師

・
テーマ

表現の可能性を引き出す講師は、
表現活動に欠かせない存在です。

プログラムのメンバーが決まったら、障害のある人、講師、スタッフ、運営をサポートするボランティアさんなど、関わる人全員で話しあう場をつくり、テーマや進めかたについて考えましょう。ときには参加者が得意なことを生かして講師になることがあっても楽しいでしょう。講師はもちろん、一緒にアートを楽しむサポーターも大切な存在です。参加者集めと同時並行で呼びかけましょう。

Check Sheet

☒ ジャンルの決めかた

絵画／書／詩／造形／版画／音楽／ダンス／演劇／その他（ ）

まずは、参加者の関心やニーズから考えていきましょう。ジャンルもテーマも、これにしないといけないという決まりはないのです。

☒ プログラムのつくりかた

1. 続けて行う継続型 or 1回でも楽しめる完結型
2. ゴールが決まっているもの or ゴールがなく自由なもの
3. 発表をめざす or 体験の機会としてプロセスを大切にすることも

☒ 講師の選びかた

- ・ 専門的なアートの知識や技術をもっている講師
- ・ 可能性を探りながら、自由な創作をうながす講師
- ・ ふだんのようにも知っている、施設職員の講師
- ・ 遠方だけれど、その人しかできない表現の場をつくることのできる講師
- ・ 顔をあわせて話しあいができ、つながりも生まれる地域の講師

Point!

会場や人数、参加者の興味から考えよう！

障害ではなく、一人ひとりと向きあえる人で行う！

どんなことでも柔軟に楽しめる人の存在が大切！

大切なのは.....

めざすのは多様な可能性を引き出す場づくり

一人ひとりの表現は多様です。そして、興味や取り組みたいこともまた多様です。それぞれのペースや関係性を見ながら交流が生まれ、居心地のよい空間をつくりましょう。明るく、風通しがよく開放的で、身体的・精神的にバリアのない場所が望ましいでしょう。とはいえ、「こんな場所でなければならない」という条件があるのではなく、必要なのは「居心地のよい場」です。

工夫次第で魅力的な空間をつくることができる！

必要以上にお金をかけなくても、魅力的な空間をつくることができます。「自分だったらどんな場所で創作したいか」を考えましょう。インターネットだけに頼らず、画材のことは地域の画材屋に聞いてみると、アドバイスがもらえるかもしれません。「こんな場所がほしい」とふだんから話していると、紹介してくれる人もいるかも。地域のなかで、活動のことを知ってもらうのも大切なことです。

継続した開催のためにマネジメントの視点を

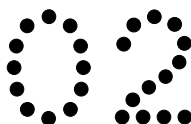
自由なアトリエにも、マネジメントが必要です。日々の活動記録やスケジュールづくり、予算管理、ときには資金を得るための助成金への申請なども必要です。資金があることで、「記念の冊子の制作」や「成果を発表する展覧会の開催」などふだんできないことも可能になります。活動のステップアップのために、また協力者を募っていくためにも、活動の意義を伝える言葉をもちましょう。

エピソード



自分たちのまちをアトリエに！





地域で表現を楽しめる 場所はどこにあるの？

試行錯誤のオープンアトリエも、ようやく毎月安定して運営ができるようになりました。しかし、参加者のなかには遠くから通うのが大変だという人も。除々に「ぜひ家の近くでも開催してほしい！」といううれしい声も届くようになってきました。せっかくみんなの意欲が高まってきたのに、アクセスの問題で来られない人がいるのは申し訳ない……。とはいえ、悩んでいても仕方がないと気分転換のため、行きつけの純喫茶にやってきました。すると、困っているようすを見かねた店主のヒゲ山ハヤ雄さんから「日曜日は店の奥が空いているから、自由に使っていーいよ。ワンドリンク注文してくれたら、場所代もいらんよ」とうれしい申し出が。駅から近く立地もいいし、コーヒーを飲みながら話に花が咲きそう！ 創作の場は、交流の場でもある。ちょっと視点を変えてみると、地域のなかで、きがねなく集まれる場所って、まだまだ近所にもありそうだなあ。



勝手にはじめた、 現代の公民館。

2003年、美術に特化した画廊をしたくて開設。でも時間の経過とともにそんな想いは微塵もなくなり、展示もあればトークイベント、ワークショップもやる、「勝手にはじめた公民館」として現在に至ることに。絵を間に置き、作家やお客様と話をすると、建設的な話に向かいやすく、要は「魂について」の話がまっすぐできるからだろうと思っています。



鯨坂 兼充さん 大阪

有限会社スカイ「iTohen」代表



トークイベントや「うどんづくり」のワークショップ。作品展示をしていると気後れする方も、こんなときはお越しに。そんな会をきっかけに、友だちになり、長く付きあいが続いている方も少なくありません。

魅力的な場所は、

同じ地平に立って、 表現する場をつくる。

プロありきの表現ではなく、一人ひとりの個性を「文化資源」としてとらえ、実験的な舞台をつくる「おとあそび工房」を開催。地域の人が参加しやすい神戸市の東灘区民センター小ホールを拠点にしています。広めの空間で「ネタみせ」のようなゆるい雰囲気。ワークショップも公演も同じところを使っているの、いつもの感じの延長で公演をすることができます。



沼田 里衣さん 兵庫

大阪市立大学都市研究プラザ
特別研究員



2014年から月1回開催。関係のなかに生まれる表現を大切に、内容は参加者の顔ぶれを想定しながら考えたり、参加者と相談したり。いろんな可能性を探っています。

島 久美子さん 和歌山

一般社団法人 共助のまちづくり
協会理事長



3カ所の福祉事業所と連携して定期的なプログラムを実施。また毎月最終日曜日は「アートたいむ」として、小学生から高齢の人が集まり、絵を描いています。声の表現活動、織り、書道、音楽なども企画。

誰もが訪れやすい、 商店街のスペース。

JR和歌山駅から徒歩3分の「みその商店街」で、2012年から「アートサポートセンターRAKU」を運営。2階は事務所、1階は社会福祉法人の地域貢献の一環でフリースペースとして提供しボランティアが運営を担当しています。障害や年齢に関係のない表現活動は年間100回を超え、のべ約800人が参加し、商店街の一角が、いろんな笑顔のつながりあう場になっています。

自分たちのまちをアトリエに！

どこにあるの？

武捨 和貴さん 長野

NPO法人リベルテ理事長



「障害のある人とともに何気ない自由や権利について考え取り組む」ことを目的に2013年設立。障害福祉事業として「スタジオオライト」、全国の施設などの雑貨を扱う「ギャラリーグリーン」を運営しています。

まちづくりの一拠点として

古い街道のなかでのつながりがある上田市の柳町で活動をしています。小学校の通学路にあるので、いつのまにか子どもが上がりこんで漫画を読んでいたり、ベンチを置いたら近所のおばあちゃんが座っていたり。イベントがあればここでの活動を外に持ち出したり、逆にショップやギャラリーに外の人が来たり。特別なことではないけれど、小さなことの積み重ねで地域にとけこんでいっていると思います。

アートは生きる力

— いつでもどこでも誰でも

関口 怜子 【ハート&アート空間ピーアイ代表】



「トイレでも絵は描ける」が私の口癖。立派なアトリエがなくとも、描きたいモノ・コトがたまって、道具さえあれば道でも公園でもOK。

デパートのショーウィンドーや複合施設の前で私はよく立ち止まる。街の今を『見える化』しているダントツの空間だから。そして思う。「往来する人々とワークショップをして、展示までできたらどんなにか楽しい場所になるかしら!？」と。

何の変哲もない、ふだんはとても静かな商業ビル1F。天井高いギャラリーに透明な10mのシート。鮮やかなポスターやチラシで、木々に歌う鳥と花々をコラージュし、犬や猫までいる公園がテーマのタペストリー。床にはグイグイと描かれた仙台曲がりネギが元気に生えている。そんな仕掛けだけで、冷え冷えとした無機質な空間は温かに。道行く人は「えっ!？」という表情で立ち止まり、ガラス越しに覗く。

また、春の花見で賑わう公園。一句詠んだり描いたり、みんなで作品を見ながら、アートでも酔いしれたり。そして新緑の夕方、同じ場所が「100万人の夕日を見る会」に。ハンモックや椅子が持ち込まれ、移動カフェや小さな食べ物屋ができて、夕陽が沈むダイナミックショーを見ながら、作品展も開催。

描くのも、見せるのも、ドラえものの「どこでもドア」の発想と同じ。我が家、学校、職場、地域の何を壊して、ずらしていくと、今がもっと幸せになるのか。自由なアートの視点、アートならではの可能性に至るところに、一石三鳥の視点でね。

どこでもアトリエ！

ビーアイの活動は、公共施設でも、まちなかでも、公園でも。創意工夫で、さまざまな場所をアトリエやワークショップ会場に変えてきました。そのなかから、4つの事例を紹介します。



杜の都・西公園を遊ぼう

仙台市の歴史ある自然豊かな「西公園」。子どもからシルバー世代までが、草花で遊んだり、歴史を学んだり、剪定にチャレンジしたり！「こんな公園になったらいいな」と、さまざまなアイデアを出し、市民が公園のありかたを考えていくきっかけにもなっています。



絵本
『ぞうくんのさんぽ』でブックピクニック

せんだいメディアテークで行われた、子どものためのワークショップ。絵本を読んだ後に、施設内を散歩。建物のイメージをかたちにするワークショップや、目隠しをして壁や床を触って楽しんだり。ときには、誰もいない夜の図書館が会場になることもあります。



かけら・カケラ・KAKERA

宮城県立こども病院で、入院中の子どもや家族を対象に、ワークショップを開催。病院で過ごす時間が長い子どもたちが、楽しい時間を自分でつくり出せるように、木・ガラス・紙・布などの身近な素材を使用。保育士やボランティアさんも参加してくれました。



せんだいまちカミュージアム

年に1度、ビーアイで活動する2歳の子から大人までの作品を中心に、油彩・水彩の絵画造形作品300点あまりを、まちなかに展示。まちをまるごとミュージアムに見立て、作品を見るのと同時に、まちの魅力を発見することもできます。

大切なのは……

どこでもアトリエになる

地域のなかには、使える空間がきっとあります。たとえば、公共施設、カフェの一角、学校の空き教室、さらには公園など……。『よい場所がないから……』とあきらめる前に、頭をやわらかく想像してみましょう。そして、『この場所、使えそう！』と思いついたら、思い切って相談を。開催のめどが立てば、場の持ち主や仲間呼びかけ、一緒に楽しめるプログラムを考えてみましょう。

公共スペースを上手に使う

参加者にもサポーターにも集まりやすい、バリアフリーな環境。公民館や公共施設の研修室を借りるのはよい方法です。公共施設は図画工作室など、心置きなく画材を使えるスペースもあり、比較的安価で借りることができます。また近年、公共文化施設では、障害のある人にも参加しやすいワークショップ、鑑賞プログラムを行っていることがあります。積極的に参加し、地域の文化施設とのつながりをつくりましょう。

決められた使いかたじゃなくても大丈夫

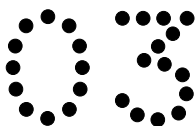
工夫次第で、場所はさまざま使いかたができます。カフェをギャラリーに、ギャラリーをトーク会場に、公民館をワークショップや舞台の発表の場に。公園をダンスや季節を楽しむワークショップの場にすることも、きっとできるはずです。もちろん、それぞれの場所でのルールを守り、配慮の気持ちは忘れずに。地域のスペースをアートの空間として活用することができたら、活動の幅も可能性もどんどん広がっていきます。

エピソード



豊かな
関係性を
育む





創作活動のサポートって、 どうしたらいいの？

運営していくなかで、個人のペースにあわせたサポートや活動記録など、個別に対応できる体制づくりが重要だとわかってきました。活動をいろんなところで広報し、SNSなどでシェアするうちに、参加者のご家族や近所に住んでいる美大生など、たくさんの方が手伝いに来てくれるようになりました。今日は美大生コンビのアトちゃんとリエちゃんが遊びにきてくれました。前回サポートした参加者の作品からインスピレーションをもらって、作品をつくったところ、なんと学校で話題になったとか！ 支援やサポートというと、一方向的な関係性が思い浮かんでしまいがちだけど、ここでは参加者とサポーターの間に「教える、教えられる」を超えた関係が生まれているようす。いつもと違う人や空間に触れることが表現を豊かにしていくこともあるようです。その秘訣は、一体どこにあるんだろう？



回を重ねて見えてくる 絵の深まりと、成長。

表現者の想いを大切に、自由な表現の芽を摘まないように見守ること。「つなぎ」は、特別支援学校の上級学校として学べる新しいかたちの学校(専攻科)です。美術の時間も高等部までとは違い、評価を自分たちで行い、創作の時間では画材や表現についておたがい影響を受けたり、合評で励ましあったり。そうすることで一人ひとりの創作も深まってきました。



八田 育美さん 奈良

ジョイアスクールつなぎ
美術担当



スタートして3年目ではじめて開催した「絵のうまみ展」。生徒からは、「たくさんの人に見てもらって、笑顔で話すことができてよかった」「絵の説明をすることができた」とうれしい声を聞けました。

サポートするときに

いつもどおりに、 みんな一緒という感じを。

アトリエの空気感、雰囲気が一番大事にしています。ゆったりした気持ちでないと、自分を表現することはできません。イメージは、メレンゲを泡立てて、粉とあわすときの感覚。スタッフがいて、で、“良さ”をつぶさないよう。サポートは絵の具をつくるなど身体の部分だけで、あとは私がそこにいる、くらいの気持ちです。(本当は、私もここで作品をつくりたいくらい！)



鈴木 温さん 奈良

社会福祉法人わたぼうしの会
たんぼの家アートセンター
HANA アートプログラム担当



アトリエでの制作は、つくりたいもの、やりたいことをいねいに聞き取ることからはじまります。日常から生まれる関係性や場の寛容な雰囲気は、その人らしさを引き出すポイントになります。

荻内 美佐子さん 京都

美術家



Photofahie Kusumoto

大阪・西成区を拠点に活動する「Breaker Project」が継続して開催する「地域に根ざした創造活動拠点の実験」に招聘。地域の方へのリサーチをもとに、2年にわたり多彩な表現を行いました。

暮らしのリズムに、 するりと入り込む。

kioku手芸館「たんす」では、WSの情報を回覧板や銭湯でのポスターなどで告知して週1回のペースで場を共有しました。日常からわずかに位相をずらし、ものづくりを楽しみ、日々へと返る。それを繰り返して楽しんでいると、お話の幅も増えていくようでした。「たんす」が、みんなの暮らしのリズムに、するりと入り込めばと思い、取り組んだ2年間でした。

豊かな関係性を育む

大切なことは？

南部 充央さん 大阪

株式会社リアライズ



ピッコロシアターで実施された音声ガイド付き演劇公演。公演づくりを支援しながら地域の人材を育成し、障害のある人が文化芸術に触れることのできる公共文化施設が、またひとつ増えました。

多様な障害のある人の 鑑賞サポートのために。

より多くの人が舞台芸術を楽しむための、鑑賞サポート。字幕や音声ガイドもそうですが、それだけでは誰もが楽しめる環境にはなりません。大切なのは、障害のある人のことを知り、鑑賞を阻む障壁を想像すること。私たちが行う舞台芸術鑑賞支援プログラムでは、障害への理解、支援する意識を深め支援できる人を育成することをめざしています。

アート活動から生まれる、 人と人との対等な信頼関係

岡崎潤 【デザイナー、アービカル☆ディレクター】



月に1度、大阪で「アービカル☆」というアート教室を開催しています。その教室には、電車に乗って遠くから通ってくる人も少なくありません。自分の意思で通い続けてくれる人がいるのは、ここが家や職場(施設)でもない、もうひとつの居場所になっているからなのだと思います。

教室と言っても、特別な指導を行っているわけではありません。一番大切なことは、ここが心を開きのびのびと表現を楽しめる場としてあり続けること。そのために、私たちは常にこの場が「どうあるべきか」を大事に考えてきました。

「自分には安心して自由に表現ができる場所がある」、「ありのままの自分(個性)を認めあえる仲間がいる」、そう思える場をつくるために、サポートする／されるという関係を越えて一緒に場を育てる仲間となることを大切にしてきました。役に立ったのは、アートがもつ、多様性を認め、人を対等にする力。アート活動を通したコミュニケーションによる関係づくりです。

サポーターは、参加メンバーのありのままを認めて応援する存在。参加メンバーもまた、サポーターを認め、勇気をくれます。そうして生まれてきた信頼関係が、この場に豊かな創造性を育くむ素になっているのだと思っています。

「来月も来ます、ずっと来ます！」そう言って帰っていくメンバーを見送りながら、私たちもこの場があることに感謝し、誇りに思うのです。



その活動は、誰のためにある？ 何のためにある？ 理念を明確にすることで、活動の方針もはっきりします。それぞれの活動にそれぞれの理念があっていると思っています。

アートサポート7つの心得

1 (興味をもつこと)

いま目の前にいる相手に興味をもつこと。そして、その人のもつ興味に、自分も関心の目を向けること。誕生日のプレゼントを開けるときのように。

2 (よくみること)

ていねいによく観察する(見る、観る)。発見した特徴を画材選びなど活動のなかに生かしていく(やってみる)。そして、未来にワクワクする(一緒に夢をみる)。

3 (よくきくこと)

活動のようすや作品を通しておしゃべりをする。込められた想いを汲み取り、想いによりそう姿勢で相手の存在を認めていく。かける言葉は、「ありがとう」だけでもいい。

4 (それぞれのペースで歩むこと)

その人が見ている世界を想像しながら、本人の主体性を大切にゆっくりとペースをつかんでいく。結果を急がず、成果にこだわらず、そのプロセスを宝物にする。

5 (決めつけないこと)

「THE正解」はない、でも「可能性」は無限にある。これはこういうものだ、この人はこういう人だと決めてしまわずに、いつもそのときを大切にすること。

6 (想いを共有すること)

サポーター同士はもちろん、家族の人ともヘルパーさんとも、たくさんの人とそれぞれの想いやヴィジョンを語りあい、共有する。違いを楽しむ文化をつくる。

7 (よく笑うこと)

いましかないこの時間を、サポーター自身が一番楽しむ。とびきりおいしいものを食べたときのような、とびきりの笑顔であいさつをする。メンバーの笑顔もお手本にして。

大切なのは.....

一緒に楽しむ関係から表現がうまれる

表現することを支援するうえでは、技術を教えることよりも、ともに表現を楽しむ関係をつくること、表現がうまれる自由な空間と時間をつくるのが大切ではないでしょうか。「教える－教えられる」という一方的な関係ではなく、共有する時間を一緒に楽しむ気持ち、おたがいがリラックスして楽しめる関係性から、自由な表現、創造性は生まれてきます。

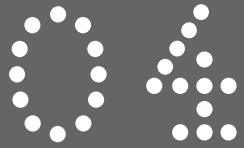
誰でもアートサポーターになれる

専門的な美術の勉強をしていなくても、経験がなくても、障害のある人のアート活動を支援することができます。たとえば、身体に障害があって画材の準備ができない人がいたら手伝う、何を描いたらいいか迷っている人がいたら一緒にモチーフを探してみる……、その人のペースを大切にしながら、創作の場をつくっていきます。誰かの表現したい、創作したい気持ちを想像・共感し、支える人がアートサポーターなのです。

いろいろな視点で見るから発見できる

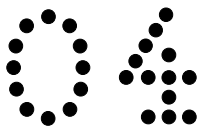
「どのような支援をしたらいいのだろうか？」「この方法で正しいかな？」など、支援をするときに悩み、迷うことは誰にでもあります。もちろん、その人と話しあいながら確認していくのが基本ですが、いろいろな視点で見てみることも大切です。たとえば、創作記録をつけていると、記録をもとに他の人の意見を聞くことができます。そうした意見交換、話し合いの場があることで、次の支援の方向性を考えることもできるのです。

エピソード



表現を分かちあう





作品をいろんな人に 見てもらいたい！

オープンアトリエの活動を継続するうちに、うれしいことに、どんどん作品が生まれてくるようになりました。作品は、その都度自宅へ持ち帰ってもらっていたのですが、ある日、参加者の一人から「僕、作品を持って帰っても、玄関に飾るしかなくて……。もっといろんな人に見てもらいたいし、自分の作品についてどう思うか感想が聞きたいわぁ〜」という声が出てきました。「たしかに、つくる場はつくったけど、見せる場についてはあまり考えていなかったなぁ……」と、創作活動の場づくりから、発表・共有する場づくりという次のステップへと考えを進めていくきっかけになりました。アートはつくるだけではなくて、見せたり、見たり、またつくったり、と続けることで、よりよい循環が生まれるもの。作品をみんなで共有したり、話しあったりできる場所、なるべく身近な地域で発表する機会も必要だと思うので、何かよい方法を考えてみようっと。



どこで誰と

どのように表現を共有するか

西尾 美也 【美術家、奈良県立大学専任講師】



表現の共有を考えるうえで、美術館やギャラリーはもちろん重要な空間ですが、それはつくり手と受け手の関係を固定的なものにもしています。

たとえば、わたしの作品に、世界各地の路上で見知らぬ他人に声をかけて、おたがいの服の交換をその場で交渉する、というものがあります。この場合、服をまとった私たちという素材があり、それに手を加える（交換する）ことで作品が成立するのですが、声をかけられた受け手側が服の交換を通じてつくり手側になります。また、路上で交換行為を行うため、その場が演劇空間のようになって人々の注目を集めます。このように、つくり手－作品－受け手という関係を自在に組み替える視点を持てば、どんなところでも表現を共有する空間になるはずです。

奈良県立大学でも、障害のある人の作品とアートを専攻しない学生という二者を対話させる試みを行いました。ふだん、福祉にもアートにも関わりの少ない学生ですが、ただ受け手側として対象を観察するだけでなく、学生が障害のある人の作品を模写したり、キュレーションしたりすることでつくり手側の立場を経験しました。その成果は、学内での展覧会として発表しました。このように、しかるべき場所で観客を待つという姿勢ではなくて、どこで誰とどのように表現を共有するかと考えて実践することが、より豊かな共有空間を生み出します。



photo: James Muriuki

《Kangaeru Street Fashionshow》2012年
渋滞で混みあうナイロビの主要道路を
キャットウォークに見立てたファッション
ショーで、伝統布カンガの柄を再構成した
作品を発表した。

ホイホイとムズムズと向きあう

角地智史 【写真家、アートキャンプ新潟事務局】



僕がはじめて企画に加わった展覧会で神林美樹さんの作品を展示した。展覧会当日に神林さんも来てくれて、自分の展示を見て「狭いねー」と言った。僕はむしろ広いくらいに思っていたのでビックリした。展示の意見があるとも思わなかった。「作品選びから搬入まで、試しに神林さん自身ができないか」、次の展覧会ではそんな提案をした。支援員の大原さんは「いやーできるかねー」と言いながら、一緒に方法を考えてくれた。

実際に展示をやってみると、神林さんは作品を箱から出てきた順に並べたり、「ここは水槽」と魚の作品を集めたりした。それからたまに作品をホイホイ投げた。それは投げやりというより、調子をつけるように投げていて、気持ちよさそうだった。転がった作品を見ると、これは作者にしかできない！ という気持ちと、転がって見にくい！ という気持ちとでムズムズした。障害のある作者と向きあうなかで、そういったムズムズはよくある。結局今回は神林さんに言って、いくつか直してもらうことにした。障害のある作者が展示まで行うことは少ない。展示に関心の無い人もいるけど、自分でやりたい人もいる。ムズムズすることも出てくる。けれど神林さんが気持ちよさそうにホイホイ投げる姿を見て、僕もまた気持ちよかった。そういった過程で生まれる気持ちを共有できる工夫があれば、今度は転がったままの展示ができるのではないかと思う。



アートキャンプ新潟では、作品を展示するとき、作者にライブで描いてもらうことがあります。作品と一緒にその人がそこにいること、交流することで生まれるものがあります。

Data 発表すること、分かちあうこと

つくること、見ること、表現を発信すること、受け取ることは、必ずしも分けられるものではなく、その境界はあいまいだったり、ときに同時だったりします。そこには、アートを通じた交流や出会いがあります。ここでは、たんぽぽの家で行ってきた、多様な発表のありかたや鑑賞のありかた、表現を分かちあうことの実践例を紹介します。

作品をみる方法、楽しむ方法、鑑賞だって多様です



こどものてつぐく美術館

作品の前で哲学者と対話する「てつぐくの時間」のあと、音楽、ダンス、創作など、アーティストとの「表現の時間」を設けます。作品から受け取ったものが、表現へとつながっていきます。



見えない人・見える人の鑑賞ツアー

見えない人、見えにくい人は作品をどう見るか。見えかたが多様であることを実感するワークショップ。視覚に障害のある人と一緒に会話しながら見ることで、見える人の見えかたも変化します。



女子大生とみるツアー

みずみずしい感性の女子大生がやさしく、楽しくナビゲートする鑑賞ツアー。障害のある人にも、子どもにも人気のプログラムです。料理人や大工さんと見ると、また違う見えかたになるかも。



赤ちゃんからの美術鑑賞ワークショップ

ふだん美術館に来にくい赤ちゃんパパママを対象とした企画。ただ見るだけではなく、ときには音楽を使ったり、創作ワークショップをして五感を使って想像力をふくらませます。

作品の展示も表現の発表も、いろいろな方法があります



まちでの展覧会
「プライベート美術館」

商店街にあるカフェや雑貨屋さんなどのオーナーが「お見合い」展示で障害のある人の作品と出会い、選んで、お店に飾るコミュニティアートプロジェクト。絵を通した出会いが生まれます。



病院での展覧会
「Art with Message」

2015年秋に近畿大学奈良病院で実施。「患者や家族、はたらく人、すべての人に楽しい時間を」と企画。作品とともに作家のメッセージを展示し、作家が作品を紹介する交流会も実施。



大学での展覧会「わたしのアトリエ」

奈良県立大学で地域について学ぶ授業の一環として実施。大学生が障害のある人の作品と出会い、展覧会を企画、運営することで、アートとコミュニケーションの可能性を探りました。



福祉施設が会場「24時間こたつ
ラジオ～ひねってまたいで音楽で」

「施設を24時間ひらくこと」に挑戦した企画。「音楽とコミュニケーション」をテーマに、たんぼぼの家に大きなこたつを設置し、ゲストによるパフォーマンスやトークをWebで配信しました。

大切なのは.....

見ること、そして表現を分かちあうこと

誰でも自分の描いた絵について、見てもらいたいという気持ちをもっているのではないのでしょうか。「人に見られるのは、恥ずかしい……」、そんな人でも展覧会という場で、誰かが自分の絵を楽しんでくれていること、自分の作品を大事に扱っていることは、きっとうれしいはずです。だからこそ、表現する場所をつくるだけではなく、表現を分かちあう場をつくることも大切なのです。

どこでも展示はできる

ギャラリーや美術館でなくても、作品を展示することはできます。たとえば、商店街のカフェの一角でお茶を飲みながら見てもらうこともできるし、病院の外来に飾ったら、患者さんやはたらいっている人たちにも見てもらうことができるでしょう。ギャラリーだからこそ見に来てくれる人がいるように、いつもと違った場で展示をすれば、いつもと違った人が見てくれます。そのことが作品の新たな魅力、可能性を引き出すこともあります。

表現を共有する場をつくろう

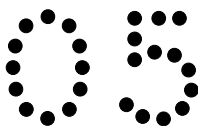
「対話型鑑賞」をはじめ誰かと一緒に作品鑑賞を楽しむ場づくりが、美術館や学校現場でも増えつつあります。一人でゆっくりと鑑賞するのも贅沢な時間ですが、誰かと一緒に自分が感じた印象を話しあったり、作品から連想したことを伝えたりするのも楽しいことです。そして、自分がこう見えていたことが、他の人にはまるっきり違うように見えている、そんな経験は一人ひとりが違う感性をもっているという、当たり前のことを教えてくれる機会にもなります。

エピソード



生活のなかにあるアート





生活も仕事も表現活動も すべてぐるりとつながっている！

オープンアトリエに参加しているももちゃん。

休みの日にアトリエに参加することで、平日に通っている就職先のおにぎり屋さんでの仕事も充実！ 仕事と休みの切り替えがうまくできるようになったそうです。ついには、お店のディスプレイ制作も依頼されるように。「ももちゃんが手がけるディスプレイ、大好評で、地域の新たな名所になっているんですよ。連日お客さんが途切れなくて……」とうれしそうに話すのは、店長の二義理田さん。ももちゃんはすでに、お店にとってもアトリエにとっても、地域にとってもかけがえのない存在になっています。障害があってもなくても、ずっと続く人生のなかで、働いたり遊んだり、飲んだり食べたりゆっくり寝たり……。

そのなかで表現する機会があるんだよなあと、しみじみ。生活の場も職場もアトリエもゆるやかにつながっているのです。



Interview はたらきながら表現を楽しみ、発表すること

インタビュー 向川貴大 【アーティスト、オープンアトリエ参加者】



2015年秋、奈良県香芝市で開かれたオープンアトリエ。参加した向川貴大くんとそのお母さんに話を聞く機会をいただきました。高校卒業後に近所のスーパーではたらきながら創作活動を続けてきたなかで、いま考えていることを伺いました。

「表現すること」について

中学生のときから小説を書いています。おばあちゃんと本読みの時間もつくって勉強中です。自分で描いたキャラクターが登場する物語も書こうとしています。苦しいときもあったり、泣きたくなるときもあるけれど、それは人として当たり前で、辛いときに泣いたり笑ったりする、そんな話。絵を描くのも好きですが、ほかの人の作品を見るのも好きです。ピカソ、岡本太郎、草間彌生といった画家の絵を見るたびに「よし、僕もがんばろう!」と思います。暗い絵も、毒々しい絵も、おもしろい絵も、見るだけでおもしろいし、影響を与えてくれる。絵はよく見たほうがいい。サッとじゃなく、じっくり風あいのすごさを見るんです。そして見たあとで頭のなかを整理します。



制作風景

母・向川真純さんから

絵画教室には行かせてないんです。近くに美術教室があるのですが、美大受験対策に力を入れておられるのを見て、邪魔したらいけないと思っていて。なので、自宅で目標を持ってこれまで取り組んできました。

「作品を見せること」について

正直に言って「人に自分の作品を見せたい」という想いがあります。人から「絵が上手だね」「すごいね」と言ってもらえることで、うれしい気持ち



オープンアトリエで最後にみんなに作品を発表している場面

がこみ上げてきます。そして、展覧会などで、作品を見て驚いたり、反応してくれたり、質問をもらうたびにうれしくなります。ライバルもいて、彼ともよく話をします。いっぱい話をするのはいいです。

「はたらくこと」について

スーパーで朝7時から15時半まではたらいしています。仕事内容は、その時々で変わりますが、たとえば、ほうれん草7ケース分を水につけておく、春菊のテープ留めをするなどです。普段スーパーのなかで何が起きているのか、よくわかりませんでしたが、スーパーではたらきはじめて、お店の裏でお肉やお魚をさばいて、パックにしているのを見ることができました。

休憩時間は1時間半。休憩中は本を読んだり、テレビやスマートフォンを見たり。ノートを持って行って絵を描くこともあります。絵があまり想像できないときは、職場の仲間と話をします。はたらきはじめてちょうど1年が経ち、最近は仕事にも慣れてきましたね。

母・向川真純さんから

小学校5年生のときに、担任の先生が、息子が描いた足の壊れたロボットの絵を見て「たかちゃんは、こっち方面やで」と言って、絵を描くようにすすめてくれたのが創作活動をしていくきっかけだったと思います。そのときに、勉強だけではなく、いろんなことを体験させてくれました。高校に入ると、美術担当の先生が「こういう展覧会を見るといいよ」と、よく声をかけてくださいました。あと「そんなところもつけてほめてくださるの？」というくらいほめていただき、それが息子の可能性を伸ばしてくれたのだと思います。

母・向川真純さんから

息子がいまはたらいしているスーパーへ実習に行った際、担当してくださった方が、特別支援の勉強をしておられました。息子の意味の理解が難しいので、上司の方が作業の説明をされる際にも「こういう風に伝えるほうが向川くんに伝わりやすいですよ」と言ってくださるなど、本当に助かりました。

収録を振り返って

「話がうまくできない息子が、描いた絵を見せたり、みんなが描いている絵を見たり。絵を描くことは、コミュニケーションをいろんな方と取る方法でもあり、癒しでもあります。そのうえに障害を理解してくださる、安心できる方々に会える場所、その場所に行けば僕をわかってくれる人がいると心から思えること。オープンアトリエはそんな場所でした」。この言葉は、向川さんがオープンアトリエに参加した後、向川さんのお母さんからいただいた言葉です。はたらきながら、休みの日に好きな絵を描くことができる、アートを通して交流する、そういう日常があることの大切さを再確認する機会となりました。

大切なのは.....

はたらくことも表現することも、生きていくこと

学校を卒業したあとに、企業ではたらく、福祉施設に通う、自宅で過ごす。社会のなかで、アートが好きな人が、アート活動を中心に日々過ごすわけではありません。大切なのは、生活のなかにアートという選択肢があること。はたらいっている人が休日にアートを楽しめることで、平日の仕事ががんばれるし、そこでは新たな出会いや交流も生まれるでしょう。選択肢が、地域のなかにあることが大切なのです。

関心をもって世界を広げていくこと

人生のなかで、たくさんの人との出会いがあり、そこから新しい経験やきっかけをもらいます。そのときに大切なのは、経験を通して関心の範囲を広げていくことです。障害のある人は、小さいころから「がんばること」「1人でできるようになること」を求められます。それも大切なことですが、もっと大切なのは「興味をもつ能力を高めていくこと」。アートは、その人の世界を広げるきっかけになります。

表現したいという気持ちを伝えること

絵を描きたいという人の想いに反応し、支援したいと思う人がいます。ほかに描きたい人が集まったら、みんなでアトリエをつくることができます。たくさん作品ができたら、展示したいと思い、展覧会をひらくとなれば、お世話になった先生や友だちも呼んで見てもらうことができます。ここで、最も大切なのは表現することであり、それを発信すること。そこから、いろいろなことがはじまるのです。

4つのオープンアトリエ 実践編



学校や施設でなくても、美術館などの文化施設でなくても、地域にひらかれた表現活動を行うことはできるのでしょうか。奈良県内の養護学校や絵画教室に調査を行った結果をもとに、県内4ヵ所で実験的に地域のアトリエ活動＝オープンアトリエを実施しました。対象者、プログラム、講師、会場、日程など、さまざまな異なる条件を設定することで、それぞれの良さ、またどういった可能性があるか探りました。



mirumiru p.58-63

いつ：土曜日午後2時～4時 どこで：福祉センター(香芝市)

対象：障害のある高校生以上

内容：絵画を中心とした創作活動

ポイント：表現にじっくり向きあう



わくわくポン！ p.64-69

いつ：平日午後4時～5時半 どこで：カフェ(生駒市)

対象：障害のある人ない人 ※子どもも歓迎

内容：身近な素材を使った創作活動

ポイント：1回だけの参加でも楽しめる



印象のまなざし p.70-75

いつ：施設の休館日など どこで：福祉施設(奈良市)

対象：視覚に障害のある人ない人

内容：視覚、聴覚、感覚を使った創作活動

ポイント：「みえかた」「感じかた」の違いを楽しむ



ふれあう大地のおすそわけ！ p.76-81

いつ：土曜日お昼・午後 どこで：畑とカフェ(吉野郡)

対象：障害のある人ない人 ※子どもも歓迎

内容：ダンスや身近な素材を使ったプログラム

ポイント：地域の資源を使う



オープンアトリエ

mirumiru



障害のある高校生以上の人に参加し、絵画を中心とした創作活動を連続で4回開催。一人ひとりの可能性をのばす造形活動の支援につなげるため、アートサポーターの参加を呼びかけ、講師とともに模索。毎回、参加メンバーの「いい！」を見つけながら、取り組んでいきました。







安心して自分の表現ができる環境

創作を「絵画」に定めたことで、はじめての画材に挑戦した人、数年ぶりに描けたという人、たくさんの「できる！」が伸びやかに表現されました。4回連続ということで、参加者の安心感や信頼感も自然に生まれました。



お茶とお菓子で一息入れてから……

毎回、作品をつくり終えたあとには、お茶とお菓子でクールダウンしながら、おたがいに作品を発表しあう、サロンを開きました。参加者同士、鑑賞しあうことで生まれる交流を大切にしました。



サポーターのていねいなフォローと記録

創作活動を支えるサポーターの主体性と役割を大切に。参加するすべての人が主役となる、自由で明るい場ができます。記録シートの記入を毎回続けることで、参加者の成長や次への支援方法がみえてきます。

開催日：11/21(土)、12/5(土)、12(土)、26(土) ※ いずれも14:00～16:00

開催場所：香芝市総合福祉センター 創作工芸室

講師：岡崎潤 コーディネート：藤井克英

参加人数：15人ほど(1回の開催につき) ◀ 地域の養護学校に通う高校生やふだんは企業ではたらくしている障害のある人の参加がありました。

12月26日(土)

4回目になり、メンバーもアートサポーターも楽しみかたの要領を得て、心地よい時間はあっという間に過ぎていきました。

13:00

会場の準備を開始。センターの創作室を借りているので、画材や道具は持ちこみます。



13:15

見通しをつけるために、ホワイトボードに座る場所とスケジュールを記入。



14:00

プログラムスタート。モチーフのヒントとなるような本や資料も準備。1時間から1時間半、それぞれのペースで創作。



15:30

完成した絵をみんなで鑑賞。お茶とお菓子をつまみながら、なごやかな雰囲気です。



16:00

最後は講師からコメント。片づけをして、参加者は解散。



16:30

サポーターは、1日の出来事や、参加者のようすを振り返り、創作記録を記入。これで、この日のmirumiruは終了です。



連続プログラムなので、名札は続けて使えるものに。参加者それぞれの好きに書いてもらう



絵の具、ペットボトルでスタンプが押せるアイデア道具など、画材お試しコーナーも設置



プログラム前にモチーフとなる本を選んだり、サポーターと会話をしたりしてリラックス

講師

デザイナー・造形教室主宰
岡崎潤

ここなら安心して自由に表現ができる、個性を認めあえる仲間がいる、そう思える場をつくるため、連続講座として関係づくりを大切にしました。活動は、参加者の主体性を重視しながら、サポーターとともに個別の展開を検討。また、毎回お茶を飲みながら作品を発表しあう「サロン」を開き、交流を楽しみました。

アートサポーター

社会福祉法人 以和貴会「我楽」
岡橋三起子

ともすれば材料がそろっているため「あれもこれも」とすすめがちになるのですが、制作者のようすを見ながら……というのが難しかったです。画材の知識も必要ですが、それ以上に制作者の呼吸にあわせるということがひとつの課題だと思います。それぞれの作品のよさを最大限に引き出せる方法を学びたいです。

アートサポーター

画家・こどもアート主宰
小原緑

とてもよい経験でした。同じ人のサポートを続けるほうが、環境づくりがやすく、制作している人も安心すると思いました。作品を見てもらうことに喜びを感じている人が多いので、制作だけでなく、人に見せる発表とのバランスをとりながら、たとえば月2回、半年単位くらいだと、更新もしやすく負担も少ないかもしれません。

参加者

・ここに来たらこういうことをするんだと見通しがもてて楽しかったのか、全出席できました。(保護者)

・サポーターさんが色鉛筆や絵の具を渡してくれてやさしくてうれしかった。講師の先生に「絵は楽しく好きなように描いていくとうまくなっていくよ」と言われたので、楽しく自分流を大事に描きました。

オープンアトリエ

わくわくポン！



障害のある人もない人も、子どもも大人も、みんな大歓迎で参加を募り、身近な素材を使った創作活動を行いました。パラシュートやボンボン人形、ときには道具もつくるなど、編み物などにもチャレンジしながら、1回だけの参加でも楽しめる場を、町のカフェでひらきました。







見通しの良い機の配置！

楽しみながら手先を使う作業が多くあり、サポーターが声をかけやすいよう、機の配置を工夫しました。講師やサポーターの立ち位置が重ならないように、できるかぎり対角線上にないようにしました。



見本を準備し伝えやすく！

テーブルの上に、リリアン編みでつくる蝶ネクタイを置き、参加者がいつでも見て参考になるようにしました。今回は道具も手づくりです。素材・道具・完成品を準備しておくことで、つくりにかたもスムーズに伝わります。



簡単な作業で、創作に楽しさを！

手づくりのリリアン編み機を使い、1周目はジグザグに。2周目は下糸を上糸にひっかけて。その繰り返しなので、はじめはサポートが必要だった人も、慣れてくるとおしゃべりしながら手を動かし、楽しい時間に。

開催日：11/24(火)「パラシュートをつくって 飛ばそう！」
12/9(水)「ふわふわ♪ ポンポン人形をつくろう」
12/24(木)「ペットボトルでつくろう リリアン編み」

開催場所：喫茶ゆうほ～

講師：竹田悠佳 参加人数：10人ほど(1回の開催につき)

協力：社会福祉法人いこま福祉会

※いずれも16:00～17:30

◀ 個人での参加のほか、親子や福祉事業所からの参加がありました。

ある日のわくわくボン!

12月24日(木)

親子や兄弟での参加もあった第3回は、ペットボトルを使った
リリアン編みで、蝶ネクタイづくりにも挑戦しました。

15:00

やさしい空気がながれる、「喫茶ゆう
ほ〜」さんの、一角を借りて、準備を
はじめます。



15:30

いろいろな材料・素材を、楽しく見え
るように設置して、準備をしていき
ます。



16:00

プログラムスタート。今日は身近な
素材をつかった、道具づくりからは
じめます。



素材であるカラフルテープは、壁に
散りばめて空間を演出。選ぶ際の楽
しさもプラスです!

17:00

ふだん使わない編み物の技法でつく
る、蝶ネクタイ。思いがけないかたち
に完成していきます。



17:15

同じ素材でも、色や編み加減で、それ
ぞれ違った印象の編み物が生まれま
した。



17:30

完成した蝶ネクタイはそれぞれが家
に持って帰りました。



1日のながれがひと目でわかるよう、メモにし
て張り出すことで、ワクワクを誘発



毛糸、ボンド、ストロー、どれも身近な素材。カ
ゴを使って親しみのある雰囲気を出す



ビニールテープは、貼ってはがせる使いやすい
素材。なによりカラフルで楽しい

講師

たんぼぼの家
アートスクール Pocket 運営
竹田 悠佳

一つひとつの作業工程をわかりやすくし、楽しさが感じられる工夫や、素材の準備に努めました。つくる過程や、創作のなかで行われるコミュニケーションを大事にしたことで、手もよく動き、笑顔や会話が生まれました。各回、それぞれに表情の違った時間と、新鮮な表現を感じることができました。

アートサポーター

アートセンター HANA
広瀬 志麻

ふだん、障害のある人への創作サポートでは、軌道修正や助言もします。オープンアトリエでは初めて会う参加者と、限られた時間を共有する点が特徴です。その時間を有意義に楽しんでもらうことに集中するので、できあがってくるものに、思いもよらぬおもしろさが見いだせます。そういった「偶発性」がおもしろいと思いました。

会場協力

喫茶ゆうほ～スタッフ
小野 桂子

1人で参加する人がいました。一緒に来るはずだった仲間が仕事の都合で不参加になったのです。人見知りをして最初ためらっていましたが、すぐに場になじんでいくようすがわかり、うれしかったです。それだけのよい雰囲気があったのだと思います。参加していたみなさんがいきいきと取り組んでいることがとても印象的でした。

参加者

- ・楽しみながら手先を使う作業が多くあり、よかったです。
- ・つくることが好きなので親子で参加しました。集中して楽しんでいましたようです。障害のある人がいる、ゆるやかな雰囲気も良かったです。
- ・あたたかい雰囲気の中で個々にあわせての支援をしていただきました。作業が少し難しかった子どもも独自の展開をほめてもらい、みんなが満足した顔で、作品を持ち帰る姿が印象的でした。

オープンアトリエ

印象のまなざし



視覚に障害のある人、ない人が参加し、創作体験を通して「まなざし」(＝頭のなかのイメージ)、「みえかた」「感じかた」の違いを楽しむプログラム。視覚に障害のある人への創作活動の支援にも取り組みました。







体験する機会をつくる！

ものづくりを楽しみ、発表することで自己表現の喜びを知る。視覚に障害のある人が、その時間を体験することを大切に考えました。感性が開放される、スイッチとなるような機会をめざしました。



見ることの奥深さを楽しむ！

「見えるってなんだろう？」を導入に、展覧会場で、見える人・見えづらい人がペアとなり作品を鑑賞。そこから湧いてきた言葉を交わしあい、見ることの奥深さを楽しみました。



音楽だからこそ伝わる可能性！

展覧会の会場で、感想を言葉やメロディにのせる音楽ワークショップを実施しました。手にとればすぐ音色が響きだす打楽器を用意し、即興の醍醐味を実感しました。

開催日：12/23(水・祝)「1. 記憶をつくる」 1/23(土)「2. 音を描く」 ※いずれも14:00～16:00
2/16(火)「3. 空間を奏でる」

開催場所：たんばの家 アートセンター HANA、アートスペース上三条

講師：吉永朋希、渡邊弥生

第3回特別講師：大坪孝洋、菊竹智之、早津あづき、毛利あゆ

参加人数：20人ほど(1回の開催につき) ◀視覚に障害のある人やその支援者、大学生、研究者などの参加がありました。

協力：社会福祉法人わたぼうしの会

ある日の印象のまなざし

1月23日(土)

第2回目であるこの日のテーマは「音を描く」。会場に流れる「演奏曲」を聴き、クレヨンのクラッチ画(削り絵)で、流れる音楽を描き出します。制作の途中で作品を交換し、描くことでコミュニケーションを楽しむ創作です。

14:00

参加者がそろったら、創作内容を説明。イメージしやすいように、参考作品も準備。



14:15

テーマ音楽を聴きながら、創作スタート。見えない人、見えにくい人は、アートサポーターと一緒に。



ルールは「クレヨンを3色以上使うこと」。こういった制約が、創作のヒントになることも。



前半の最後に、黒のクレヨンで画用紙を塗りつぶして、色塗りの作業はいったん終了です。

15:00

色塗りの終わった作品を、参加者同士でランダムに交換。同じ音楽を聴きながら、次は削っていきます。



15:40

作品を集めてみんなで鑑賞。色を塗った人、削った人とで、作品について語りあい、この日のプログラムは終了です。



椅子の配置を口の字型とし、参加者の横にアートサポーターが必ず1人座る



使う画材はクレヨンだけ。かんたんな準備で大丈夫



作品の発表。アートサポーターとともに、和気あいあい、工夫点を話しあう

講師

たんぼの家 アートセンターHANA
アートディレクター

吉永朋希

大切にすることは「また創作がしたい!」と思える時間にすること。そのために画材と技法を親しみやすいものにしました。日用品を使ったコラージュ、クレヨンの削り絵、扱う素材は100円ショップやデパートで買えるものです。手軽さをだすことで、純粋な創作の楽しさに熱中してもらえました。

参加者

奈良市視覚障害者協会
内藤恒史

絵を描くこと自体はじめてだったので、思うままに手を動かした。楽しく参加できたので、また機会があれば参加したい。思ったことや感想がメロディになることもすごいと思った。いつでも誰でもアートづくり(創作活動)ができる場所があればと思う。

講師

たんぼの家 アートセンターHANA
アートディレクター

渡邊弥生

瞬間瞬間に起こる予想外の出来事を大事にしています。1つの作品を選ぶ場面で3つ選んでも、それもOK。歌うたびに変わるメロディーや歌詞があるのなら、ソロパートにしてみよう。“それもOK”の幅を広げておくと、参加者も講師ももっとおもしろいところへ転がっていきます。

参加者

石田光枝

視覚に障害のある人が、思いのほか具象的な方向で描こうとされていたのが印象的でした。時間があっという間で、感想シェアの時間がもっとあれば良かったです。音楽づくりでは「こんなつくりかたがあるのか」と、すごい発見でした。印象を言葉にして音にする。それを共同作業で行う楽しさを味わいました。

オープンアトリエ

ふれあう大地のおすそわけ！



障害のある人も、ない人も、町の人も、町を訪ねた人も、季節を楽しみながら一緒に過ごす空間をつくるプログラム「ふれあう大地のおすそわけ!」。ダンスをしたり、地場産の野菜や綿といった地域から生まれた素材を用いて、五感を豊かにしながら、楽しみました。







場所や空間の“うま味”をとらえる！

吉野の季節を楽しみながら参加者が一緒に過ごす特別な空間。ビニールハウスを会場に選んだことで、参加者のみなさんも大喜び。太陽の日差しを浴びながら、作物を育てる大地の上で、過ごす時間を考えました。



身体も創作活動のひとつになる！

講師の佐久間さんはダンサーでジャワ舞踊家。でも「さあダンスをはじめましょう」とは言いません。手が触れたり、声が重なったり、となりの人からとなりの人へ、さざ波のように広がり、身体が自然と喜び、開放されていきます。



地域の人も巻き込んで過ごす！

まちの人も一緒に場を共有するなかでさまざまな会話が生まれます。「すてきな風景ですね」「そう？ いつも見ているから」という会話のあと、裏山を歩き「ほんとだ、こんなによい光景だったのね」とおたがいが発見していきます。

第1回 土と湯気のダンス！ 踊って満足・食べて満腹

開催日：1/9(土)

開催場所：どろんこ畑(カフェかてと)

講師：佐久間新

参加人数：20人ほど(1回の開催につき)

第2回 綿でかわいいオブジェをつくろう！

開催日：3/12(土)

開催場所：わーくさぽーとPono

講師：鈴木温・広瀬志麻

参加人数：20名ほど(1回の開催につき)

協力：NPO法人どろんこ畑、社会福祉法人総合施設美吉野園

ある日のふれあう大地のおすそわけ！

1月9日(土)

「土と湯気のダンス！ 踊って満足・食べて満腹」と題して、ビニールハウスを舞台に、地元の食材でできた鍋とダンスを楽しみます。料理やダンスを通して、ふだんとちがう日常をアジわいました。

11:00

メンバーが全員集合してまもなく、いつの間にかダンスがはじまっていた。



さまざまな障害のある人とともに、言葉に頼らないコミュニケーションが交わされていきます。

12:15

調理場には、みずみずしく、どれもおいしそうな、地元の野菜がたっぷり準備されました。



食材の切り分けは、みんなで協力して行いました。リズムカルに手を動かして、ダンスのように。

12:45

豆乳、トマト、中華など、いろんな味付けのお鍋がそろい、鍋がはじまりました！



14:00

食べ終わったらビニールハウスを出て、食材を育んだ豊かな自然のなかで、フィナーレのダンス！



ビニールハウスのなかは冬でも暖かい。土の上なので音も気にせず大胆に動くことができる



スーパーで見るのとは違って、地元の野菜はとても新鮮。ざくざく切る音も軽やか



参加者全員で準備したお鍋を、ゆっくり味わいながら、笑いあう。食事も表現の一部

企画者

一般財団法人 たんぼぼの家
事務局長 岡部太郎

カフェの隣にあるビニールハウスや野菜など、地域の「今そこにあるもの」を生かした企画で、ダンサーの佐久間新さんを講師に迎えて開催しました。絵画・造形などの創作活動だけでなく、身体表現や料理、食することすらも、大きくは自己表現でしょう。日常のなかにも、輝く瞬間があることを共有できたと思います。

講師

ダンサー・ジャワ舞踊家
佐久間新

柿畑の丘が広がるロケーションがよく、暖かくて換気がすぐできる利点のビニールハウスの会場もよかった。土間で野外料理やダンスが大胆にできた。日常の食材、調理や食べるというふだんの行為の大切さをとらえ直すことがダンスにもケアにも大切で、そのことを、参加者と地元に住むスタッフ、ともに味わえたと思う。

第2回 会場協力

社会福祉法人総合施設美吉野園
水口正憲

吉野学園での綿の取り組みを話し、共感して下さったことは、この上ない喜びでした。そして、障害のある人もない人も1つの素材を通してともに楽しむという明確なヴィジョンが実際の体験の場からはっきりと見えた気がしました。こうした活動をどのように外部や地域へ発信していくか、これからの大事な課題でもあります。

参加者

- ・息子の新たなようすを見ることができてゆっくり過ごせました。
- ・音の力ってすごいですね！
- ・野外でお鍋初体験。すごくおいしくて、たくさんいただきました。
- ・学校ではできないこと、親子でできることを、これからも楽しみにしています。
- ・なごやかで楽しかったです。
- ・自宅の近くに、たくさんの木や葉があるので、またつくりたいと思います。

さいごに

カルチャーセンターが充実しているよりは、小さな絵画教室が家の近くにいろいろ、たくさんあった方がいい。同様に、大きな公募展がいっぺんでやれる大きな展示スペースもいいけれど、地域でさまざまやっている人たちの個展が、いつでも、あちこちで見られる、スペースやシステムがあることも大切だ。

地域の文化のポテンシャルの尺度は、こんなふうに、その地域が、個人の時間の流れ方を、どれほど尊重したシステムを、肯定的に無理なく作っていけるかに現れてくる。

齋正弘、「アートのスペースづくりは、コミュニティにとってどのような意味をなすか」、『こんなアートのスペースがあったらいいな―障害のある人・アート・まち』、日本障害者芸術文化協会、2000年、p.145

わたしたちは、1990年代からアートを軸にしながら、障害のある人とともに生きることの多様性を社会に提案すること、そして社会が多くの人にとってより生きやすいものになることをめざしてきました。そうした活動のなかで、地域にあるアートのスペースが大きな役割をはたしていることがわかり、全国の先進的な障害のある人のアートを中心とした福祉施設や民間のアトリエなどを調査し、2000年に日本障害者芸術文化協会（現NPO法人エイブル・アート・ジャパン）から発行した本が、『こんなアートのスペースがあったらいいな―障害のある人・アート・まち』です。

日本の障害のある人のアート活動の多くは、福祉施設を中心に発展してきましたが、近年、ひらかれた福祉のあり方が求められているなかで、アート活動もコミュニティへの展開を意識したプログラムや企業と連携した商品づくりなど、施設から地域へと広がりを見せ、たくさんの魅力的な活動が生まれています。

しかし、2014年度に厚生労働省の障害者の芸術文化活動支援モデル事業に取り組み、「障害とアートの相談室」を開設し、アートに関するさまざまな相談を受ける窓口をつくったところ、予想外に多かったのが、障害のある当事者からの相談でした。ニーズ調査によってわかったのは、特別支援学校時代は美術や音楽などに取り組んでいても、もちろん全員がアートを主な活動とする福祉施設に行くわけではありません。企業に就労する人もいれば、在宅で過ごす障害のある人もいます。もちろん、福祉施設も生産業やサービス業など、さまざまなことを仕事や活動にしており、アート活動に取り組む施設は多くはありません。企業ではたらくたい人は企業へ、パンづくりに関わりたい人はパンをつくる施設へ行くなど、障害のある人ののはたらくことの選択肢は少しずつ増えており、制度としても障害のある人がはたらくことを支援する制度も増えてきました。それは喜ばしいことですが、一方で、地域のなかでアート活動に取り組める環境はまだ十分ではないのが現状です。

そうしたなかで今年度、実験的に取り組んだのは、地域にお

ける創作活動の場づくり、「オープンアトリエ活動」です。取り組むなかで、一番多かったのは「創作する場もほしいけれど、作品を見てもらえる場や意見交換の場もほしい」という声です。

企業に就労している障害のある人や在宅で過ごしている人などが、家で絵を描いている場合、公募展に応募することが発表の機会になります。公募展で入選すると展覧会で絵が展示され、それはとてもうれしいことです。しかし、その機会は必ずしも多くはありません。公共文化施設が創作活動を体験できるワークショップをひらくことも増えましたが、継続的に参加できるプログラムはまだまだ少ないのが現状です。

そこで、オープンアトリエの活動では、「安心して表現できる場をつくる」と同時に「アートを通して交流できる時間をつくる」ことを大切にしました。また、オープンアトリエをひらきながらどういった仕組みがあれば、やりたい人が地域で活動を続けられるかを考えることにしました。

活動のなかで実感したのは、誰かが自分の表現を受けとめてくれる、自分も誰かの表現を真摯に受けとめる、その信頼関係がなにより大切でベースとなるということです。障害のあるなしにかかわらず、誰にでもひらかれた寛容な場が、オープンアトリエなのです。

同時に、地域に障害のある人のアート活動を支えたい、関心がある、自分も関わりたいと思っている人がたくさんいること

もわかりました。それは、特別支援学校の先生だったり、地域の美大生だったり、福祉施設職員だったり、障害のある人の親や友人だったり。誰かの「表現したい」という想いが他者に届いたとき、それに呼応してくれる人がいます。そして、支えるときに必要なのは美術の専門的な技術だけではなく、支援する、されるという一方的な関係とは異なる「ともに表現を楽しむ姿勢」でした。

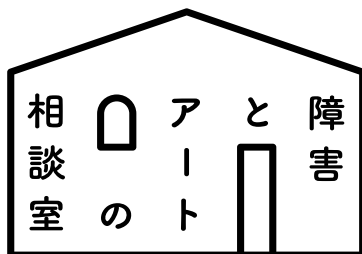
さらに、地域には創作活動の場となりうる場所が、たくさんあることもわかりました。カフェの一角も地域の公民館も、休日の福祉施設も、ときには公園のような屋外のスペースも工夫とアイデアで、いつでもアトリエになるのです。地域のなかにある資源を発見したり、つないだりするのは、わたしたちの想像力であり、創造力です。

豊かに生きること、充実した生活をおくることは、もちろんアートだけではできません。しかし、アートがあることで、一人ひとりの生活も、地域もより楽しく、より豊かなものになっていく可能性をもっています。

表現したい想いを発信してみる、地域でのアトリエ活動を誰かと一緒にやってみる、その一歩をふみだし、はじめてみませんか。

一般財団法人たんぽぽの家

困ったとき・情報がほしいとき・学びたいときは……



たんぽぽの家では、障害のある人の芸術活動について、全国の福祉やアート分野の人たちとともに課題を共有し学びあう機会をつくってきました。2014年から、障害のある人、その支援者の課題の解決、また情報交換やネットワークづくりの場として「障害とアートの相談室」をオープンしています。障害のある人の表現を通して、誰もが自由に表現できる社会、いきいきと生活できる社会をめざします。

- 1 相談窓口の設置
- 2 研修事業(施設見学ツアー、インターンシップ、セミナーなど)の実施
- 3 ネットワークづくり、作品、作家の調査・発信(調査、書籍の出版、展覧会開催など)

障害とアートの相談室

で検索してみてください！

<http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

発行物のご案内

「障害とアートの相談室」では、調査や研修、事業などの成果をより多くの人と共有できるように発行物を制作しています。それぞれ、障害とアートの相談室のWebサイトよりPDFファイルをダウンロードできます。

もうひとつの見方 —— 奈良の障害のある人の表現

障害のある作家10人の表現と表現がうまれる場の魅力を紹介。障害のある人の表現や作品への向きあい方、見方についてのメッセージを掲載しています。
(2015年3月発行)



学校卒業後の障害のある人の地域での表現活動に関する調査と実践 報告書

特別支援学校や地域の絵画教室など、障害のある人の地域の表現活動の調査や実践の報告。また、アートサポーター養成と研修の内容も掲載しています。
(2016年3月発行)



なやんで ひらいて 2歩すすむためのハンドブック

障害のある人のアート活動を支援する人や当事者などの具体的な課題をマンガで紹介。また、40人の先進的な活動を行う実践者の考えや取り組みの事例を掲載しています。
(2015年3月発行)



「病院・裁判所・大学での展覧会」 評価発信事業 報告書

障害のある人の作品をふだんアートとは遠い場所で展示することで、アートがもつ力を考える展覧会を実施。それぞれの展覧会の実施のプロセスや可能性を報告しています。
(2016年3月発行)



奈良県における障害のある人の芸術文化活動に関する調査 報告書

福祉サービス事業所や個人で芸術文化活動に取り組む人たちに対してのニーズ調査や障害のある人のアートに関心をもつ企業や、市民の意識調査の報告を掲載しています。
(2015年3月発行)



※ 以下よりPDFファイルをダウンロードできます
<http://artsoudan.tanpoponoye.org/publications/>

地域にひろがるオープンアトリエ なやんで ひらいて つながる ためのハンドブック

発行日：2016年3月31日

発行元：一般財団法人たんぼの家

〒630-8044 奈良市六条西 3-25-4

Tel 0742-43-7055 Fax 0742-49-5501

Email artsoudan@popo.or.jp

URL <http://artsoudan.tanpoponoye.org/>

企画・執筆：岡部太郎、森下静香（一般財団法人たんぼの家）

編集ディレクション&編集：多田智美（MUESUM）

編集：永江大（MUESUM）

アートディレクション：原田祐馬（UMA/design farm）

デザイン：西野亮介（UMA/design farm）

漫画&イラスト：ニシワキタダシ

写真：衣笠名津美（p55-p80）

協力：池崎多佳子、太田啓子、賞雅裕子

印刷・製本：株式会社山田写真製版所

※本書は「平成27年度 障害者の芸術活動支援モデル事業（厚生労働省）」の
一環として制作しました。

※以下よりPDFファイルをダウンロードできます。

<http://artsoudan.tanpoponoye.org/publications/>

